愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅶ
－岩崎 25 号窯式前後の須恵器窯、桟敷 1 号窯跡、八事一堂跡出土資料－

大西　遼
（愛知県陶磁美術館　学芸員）
栗名　彩香
（愛知県陶磁美術館　学芸員）

はじめに

愛知県は国内屈指の古窯群である猿投山西南麓古窯跡群（以下、猿投窯）が古墳時代中期に開窯して以降、連綿と窯業生産を展開してきた地域である。日本全国を見ても愛知県のように古墳時代から現在に至るまで、連綿と窯業史を追うことのできる地域はない。

県下の窯業遺跡は各時代の生産活動の様相を現代に伝えるものであり、当地の窯業史のみならず日本陶磁史の基礎資料として極めて貴重な情報を内包している。これらの資料の研究・活用を目指し、2018 年以降窯跡出土資料を主な対象として実測図の作成を通した考古学的基礎的調査の報告を行ってきた（註 1)。本稿では令和 5（2023）年度に実施した愛知県陶磁美術館所蔵・保管資料の実測調査成果を踏まえ、猿投窯内の岩崎 25 窯式前後の須恵器窯、黒笹 90 号窯式期の猿投窯鳴海地区鳴海支群に所在する桟敷 1 号窯跡出土資料の報告を行う。また窯業遺跡そのものでは無いが、猿投窯東山地区内にある堂跡で、緑釉緑彩陶器や無釉陶器を含む猿投窯産陶器の良好な資料群が出土している八事一堂跡（八事小堂跡）出土資料についても実測調査・科学分析を行ったので、その成果を報告する（図 1)。「３．八事一堂跡出土資料　（３）出土陶器の科学分析」は栗名が執筆し、その他は大西が執筆した。本稿における実測図中の各調整等の表現については図 2 に示す。

本稿で用いる猿投窯編年は『愛知県史　別編　窯業 1　古代　猿投系』に依拠する（註 2）ただし、実年代については研究者間で意見の相違も大きく、本稿では詳細な実年代を示さず窯式の提示に留めた。また、『愛知県史　別編　窯業 1　古代　猿投系』では、百代寺窯式までの猿投窯の製品について須恵器・瓷器（青瓷・白瓷）の用語が使用されている。前稿までは主に窯跡出土資料を扱っていたため、上記用語で運用上特に問題無く使用してきた（註 3)。しかし、本稿で扱う八事一堂跡の出土品は消費地遺跡出土品であり、瓷器類の施釉の有無を明確に表示したいことに加え、実際に 9 世紀代を中心としながら瓷器系の無釉製品を非常に多く含んでいる。よって本稿では施釉の有無を明確に示すことを優先し、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、無釉陶器（須恵器を除く瓷器系の製品）の用語で統一表記する。

１．岩崎 25 号窯式前後の須恵器窯

（１）鳴海 202 号窯跡出土資料（ＮＮ202 号窯跡、図 1・5）

収納箱に「N-2」とある。名古屋市緑区神の倉二丁目に所在する窯跡で、別称にN-2 号

窯跡、神の倉 4 号窯跡がある（註 4)。猿投窯鳴海地区鳴海支群に属する。

出土資料は全て須恵器である。3～7 は杯蓋、8～13 は有台杯身、14 は無台椀、15 は無台杯身、16 は短頸鉢、17 は長頸瓶、18 は長頸瓶ないし水瓶の底部、19 は短頸壺、20 は壺ないし大形の長頸瓶、21 は大形浅鉢、22～25 は甕である。なお、古代の須恵器の壺（広口壺）と甕の境界については不明瞭なものがあるが、本稿では甕と一括して表記した。10 の有台杯身の底部外面にはヘラ記号が確認できる。24 は肩部外面に平行タタキ痕があり、頸基部よりに三本の沈線が巡る。胴部内面には無文当て具痕が残るが、木製の当て具が痩せて年輪が浮き出ている様子が確認できる。25 はわずかに残存する肩部外面に平行タタキ痕が確認できる。なお 17、19 の肩部外面は、剥落した痕跡も含めると全周に灰釉層を有していたと考えられる。ただし刷毛塗り痕等は無く、原始灰釉と判断される。

杯蓋の口縁部周辺の形態や、有台杯身の腰部及び高台の形態、回転糸切底を持つ無台椀・無台杯身の存在、丸肩の長頸瓶の存在等を総合的に判断すると、当資料は岩崎 25 号窯式期に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

（２）岩崎 25 号窯跡出土資料（Ｉ-25 号窯跡、図 1・6）

収納箱に「Ｉ-25」とある。日進市香久山四丁目に所在する窯跡で、猿投窯岩崎地区に属する。注記は「Ｉ-25～6」とあり、岩崎 26 号窯跡（Ｉ-26 号窯跡）は岩崎 25 号窯跡に隣接する黒笹 90 号窯式期の窯とされている（註 5)。実際に収納箱には黒笹 90 号窯式に相当する灰釉陶器が確認できる。ここでは明らかに岩崎 25 号窯式期に比定でき、岩崎 25 号窯跡出土として問題が無い資料を報告する。なお、当窯は岩崎 25 号窯式の標式窯とされている。

出土資料は全て須恵器である。26・27 は杯蓋、28～30 は有台杯身、31・32 は無台椀、33 は無台盤、34 は有台盤、35 は甕である。愛知県陶磁美術館保管。

（３）鳴海 139 号窯跡（ＮＮ139 号窯跡、図 1・7）

収納箱に「N-9」とある。名古屋市天白区平針南一丁目に所在する窯跡で、別称にN-9 号窯跡がある（註 6)。

出土資料は全て須恵器である。36～38 は杯蓋、39・40 は有台杯身である。杯蓋口縁部周辺や、有台杯身の腰部及び高台の形態から鳴海 32 号窯式期に比定できる。愛知県陶磁美術館保管。

２．桟敷 1 号窯跡出土資料

（１）桟敷 1 号窯跡について（図 1）

豊明市沓掛町桟敷に所在する窯跡で猿投窯鳴海地区鳴海支群に属し、須恵器、緑釉陶器素地、灰釉陶器の生産窯として知られている。1965 年に窯体と灰原が確認され、1966 年に土地改良工事に伴い白菊古文化研究所（茨城県石岡市）により発掘調査が行われている（註 7)。正式報告書の刊行はなされていないが、出土資料の一部は実測図や写真等を交えて紹介さ

れている（註 8）。本窯の出土資料の中でこれまで最も注目されてきたものに、「淳和院」と刻書された鉢あるいは匣（匣鉢）等と紹介されきた陶片がある。淳和院とは淳和天皇（786～840）が天長 10 年（833）に譲位して以後の院御所であり、淳和上皇崩御の後は皇太后が親王と同居したが、貞観 16 年（874）に火災により焼失したとされる。この淳和院のヘラ書き陶片の存在により、猿投窯の経営の背景に当時の上皇あるいはその周辺の存在があったことが明らかとなり、猿投窯の性格や特異性が強調される根拠の一つとしても捉えられてきた（註 9）。

当窯出土資料については一部が豊明市教育委員会に所蔵されているが、先述の「淳和院」刻書の陶片を含め、実測図や写真で示された当窯の出土資料の多くが昨今所在不明の状態だった。愛知県陶磁美術館は、令和 5（2023）年度にこれまで掲載例のあった資料を含む当窯出土の 8 点の陶片資料を収集した（資料番号Ａ007414）。ここで基礎的な資料報告を行う。

（２）桟敷 1 号窯跡出土資料の基礎的報告（図 8・9）

先述した愛知県陶磁美術館所蔵の桟敷 1 号窯跡出土資料は、須恵器 2 点、灰釉陶器 1 点、無釉陶器 1 点、緑釉陶器素地 2 点、窯道具 2 点で構成される。

須恵器は無台杯身と蓋と考えられる破片があり、いずれもこれまで同窯出土資料が取り上げられた文献には未掲載の資料と考えられる（41・42）。41 は高 3.7 ㎝、口径 12.6 ㎝（復元）、底径 5.6 ㎝の無台杯身で、底部には「長」の刻書がある（資料番号Ａ007414-000004）。

42 は高 1.6 ㎝（残存）、天井径 5.9 ㎝を測る破片だが、図化したものとは天地逆の無台椀である可能性も考えられるだろう。しかし、内面に顕著な降灰や窯ボロ等の付着が無いのに対し、外面は全面に降灰が認められ自然釉となっており、窯ボロも付着していることから、外面を上にして窯詰されたと考えられ、無台椀ではなく蓋と判断した。内面にはかなり崩れた陰刻花文が施されている。陰刻花文は基本的に緑釉陶器に施される文様で、稀に灰釉陶器に施されることはあっても須恵器に施されることはほとんど無いが、本資料が珍しい作例となる（資料番号Ａ007414-000003）。

43 は灰釉陶器の椀で、蛇ノ目高台を有する。写真及び該当すると考えられる実測図の掲載例がある（註 10）。高 3.9 ㎝、口径 15.3 ㎝、底径 7.5 ㎝で内面全体にたっぷりと黄緑色の灰釉層が認められる灰釉陶器で、火前については口縁部外面に自然釉が認められる。ただし、明確な灰釉の刷毛塗り痕は確認できない。器面にヘラミガキは認められない。見込みには 3.8、3.8、3.6 ㎝の間隔で三叉トチン跡が残り、底部外面には 3.9、3.8、3.7 ㎝の間隔で三叉トチン跡が残る（資料番号Ａ007414-000006）。

44 は無釉陶器の椀で、蛇ノ目高台を有する。本器に該当すると考えられる実測図の掲載例がある（註 11）。高 5.8 ㎝、口径 19.6 ㎝、底径 8.9 ㎝で 43 を相似形に拡大させたような形である。口縁部から体部の内面、及び口縁部外面には緑白色の自然釉と考えられる灰釉層が認められるが、見込みには重ね焼きにより降灰や自然釉が認められない。見込みには三叉トチン痕が認められず、直接重ね焼きがなされている。底部外面にも三叉トチン痕は認めら

れない。口縁部内面に上に重ね焼きしていたと考えられる椀の口縁部片が融着している。以上のことから本器は無釉であり、器面にヘラミガキも認められないことから緑釉陶器素地としても考え難く、無釉陶器として捉えておく（資料番号Ａ007414-000005）。

緑釉陶器素地には花文輪花皿と花文椀がある（45・46）。45 は写真及び該当すると考えられる実測図の掲載例があり（註 12）、高 3.3 ㎝、口径 18.3 ㎝（復元）、底径 8.1 ㎝（復元）である。4 輪花になるものと思われるが、口縁端部を一部切り取り、体部外面に縦方向の切り込みを入れ、同内面に粘土を貼り足すことで輪花とする。見込みにはわずかに四弁花と推測できる陰刻花文が確認でき、体部内面には内から外に伸びる形で横方向から見た様子の陰刻花文が描かれている。花弁の描き方は丸頭＋条芯のタイプである（註 13）（資料番号Ａ007414-000008）。

46 はこれまで同窯出土資料が取り上げられた文献には未掲載の資料と考えられる。高 1.6 ㎝（残存）、底径 6.0 ㎝である。見込みには中心の四弁花から更に四方に三弁ずつ展開する陰刻花文が描かれ、花弁の描き方は一部尖頭だが全体的に丸頭で、条芯のタイプである（註 14）（資料番号Ａ007414-000007）。

窯道具には匣（匣鉢）がある（47・48）。47 は先述の通り「淳和院」の刻書がある陶片として注目されてきたもので、写真の掲載例がある（註 15）。当資料については須恵器の鉢、窯道具の匣とする二つの考えがあるが、粘土紐の輪積み痕を良く残し、内外面とも粗い回転ナデで仕上げられる様子から匣と考えている。なお、匣であれば本来認められないはずの内面に自然釉が認められるが、割れ面にも自然釉が認められるため、内面の自然釉は本器欠損後に窯内で生じたものと考えられる。高（残存）8.3 ㎝、口径 23.2 ㎝（復元）である。「淳和院」の刻書は口縁部下から縦書きで刻まれており、「和」の左下、「院」の左半分程が欠失している（資料番号Ａ007414-000002）。

48 はこれまで同窯出土資料が取り上げられた文献には未掲載の資料と考えられる。粘土紐の輪積み痕を良く残し、内外面とも粗い回転ナデにより仕上げられる様子から、47 と同様に匣と考えている。高 6.8 ㎝（残存）、口径 35.4 ㎝（復元）である。口縁部から少し下がったところに、さんずいが崩れ縦書きの直線風になっているが、47 との関係から「淳」と考えられる刻書がある。48 が 47 と同一窯の出土品で同じく匣と考えられるものであり、しかも似通った位置に 47 には「淳和院」と刻まれていることを踏まえると、本器の欠損部下には「和院」が続き、もとは「淳和院」と刻書された匣だったと推察される（資料番号Ａ007414-000001）。筆致は 47 と 48 で様子が異なる。

以上が桟敷 1 号窯跡出土資料の概要だが、桟敷 1 号窯跡はこれまで黒笹 90 号窯式期に属する窯と考えられてきたが（註 16）、45・46 の陰刻花文の様子等からも本稿では黒笹 90 号窯式期頃で押さえておきたい。

（３）蛇ノ目高台椀の他例－黒笹 7 号窯跡、篠岡高根窯跡出土品（図 3・4）

桟敷 1 号窯跡では先述の通り灰釉陶器及び無釉陶器の蛇ノ目高台椀が出土している（43、

44)。蛇ノ目高台椀は9世紀代の猿投窯で一定量生産されているが、形態的変遷についてはこれまで十分に議論されてこなかった感がある。猿投窯あるいは尾北窯の蛇ノ目高台椀の検討を行い、桟敷1号窯跡出土品の位置づけを行う必要があるが、本稿ではその予備的作業として愛知県陶磁美術館保管の猿投窯黒笹 7 号窯跡と尾北窯篠岡高根窯跡出土品について基礎的調査報告を行う。

図3-1は黒笹7号窯跡（図1、K-7）出土の蛇ノ目高台椀である。既に紹介されてきた資料であるが（註17)、改めて再実測・観察を行った。底径6.5㎝に対し蛇ノ目高台の幅は1.4㎝で、接合痕や削り痕が明確に確認できず、削出し高台か貼付け高台か判断しかねる。高台基部の様子等が貼付け高台とするにはやや違和感があるが、高台接地面や高台より内側は回転ナデにより仕上げられており、高台を削り出した後、回転ナデにより仕上げられている可能性もある。見込みは平坦面を作らず湾曲して口縁部に向けて立ち上がる。腰から口縁部にかけては直線的に外に開く。胴部から腰部にかけては回転ヘラ削りの後回転ナデが施されている。内外面とも単位がわからない程丁寧に回転ナデが施されているが、明確な単位のあるヘラミガキは認められない。内面には明確な灰釉層が認められず無釉と捉えて差し支えないと考えられる。口縁部から腰部の外面には明確な灰釉層は認められず、薄く自然釉と考えられる層が認められるのみである。見込み、底部外面とも三叉トチン痕は認められない。

本器については、灰釉陶器とする説、灰釉陶器焼造への試行とする説、緑釉陶器素地とする説等があり、研究者により見解が分かれている（註18)。黒笹7号窯跡では三叉トチンや匣の出土が確認されておらず、本器に明確な単位を持つヘラミガキが認められないことから、現状では緑釉陶器素地として考えることは難しいように思われる。また、先述のように明確な灰釉層が認められないことから灰釉陶器ともすることができず、現状では無釉陶器として扱いたい。

図 4-2 は篠岡高根窯跡出土の蛇ノ目高台椀である。既に本器と考えられる実測図が紹介されているが（註19)、改めて再実測・観察を行った。なお本窯出土の須恵器について、拙稿にて実測調査の報告を行っており図4に再掲載した（図4-再1～8）（註20)。図4-2は底径 7.1 ㎝に対し蛇ノ目高台の幅は 2.4 ㎝で、接合痕や削り痕が明確に確認できず、削出し高台か貼付け高台か判断しかねる。高台を含む底部外面全体に回転ナデが施されており、高台を削り出した後、回転ナデで仕上げられている可能性もある。また、高台を貼り付けた後、高台基部等を削り出して成形し、最後に回転ナデで整えられた可能性もある。見込みは平坦面を作らず、湾曲して口縁部に向けて立ち上がる。腰から口縁部にかけては直線的に外に開く。胴部から腰部にかけては回転ヘラ削りの後、単位がわからないの程丁寧に回転ナデが施されている。内外面とも明確な単位のあるヘラミガキは認められない。内面には全面に厚く灰釉層があるが、灰釉の刷毛塗り痕は認められない。口縁部から腰部の外面には、部分的に自然釉がうっすらとかかる。見込み、底部外面とも三叉トチン痕は認められない。本器は内面に明確に厚みのある灰釉層が認められ、灰釉陶器の椀として捉えておく。本器の時期だが、本窯出土品として角高台を有する灰釉陶器の椀の実測図が掲載されており（註21)、黒笹14

号窯式期に比定しておく。なお、篠岡高根窯跡（高根古窯）は、1983 年の段階で地図上の位置が特定できないとされている（註 22)。

３．八事一堂跡出土資料

（１）遺跡の概要と既存の評価

名古屋市昭和区八事富士見に所在する八事一堂跡（八事小堂跡）は、猿投窯東山地区が展開するエリアに位置している。本遺跡は平安時代前期を中心とする遺物が出土しているが、この時期猿投窯では須恵器生産が終焉に向い、緑釉・灰釉陶器といった施釉陶器生産の絶頂期を迎えていた。しかし当期の生産の中心はより東方・南方に位置する鳴海・折戸・黒笹・井ケ谷の各地区であり、東山地区自体は古墳・飛鳥時代に盛期を迎えた後、奈良時代に生産を縮小し平安時代前期にはわずかの窯が確認されるにすぎない。

こうした中、それまで古代寺院が存在していなかった東山丘陵の頂部に八事一堂跡は突如として出現したとみられる。当遺跡については、密教法具と関係するものと思われる陶器類を有する小堂宇であるとされている（註 23)。また、当遺跡は尾張地域では数少なく、名古屋市内では唯一の古代の山林・山岳寺院として捉えられるとされ、当遺跡の立地する丘陵頂部の平安面には確認された小堂宇のみでなく、寺院関連遺構が更に存在していた可能性も指摘されている（註 24)。また、当遺跡が天白川と植田川の合流点を見下ろす丘陵頂部に位置し、密教関連の陶器類が存在することから、猿投窯の流通にかかわる祭祀施設という想定も提示されている（註 25)。

以上のように当遺跡の密教的要素の根拠となってきた陶器類だが、その内容については一部の実測図の提示や解説に留まっており全貌は未だ明らかでない。今回改めて未実測資料も含め資料化を行った。

（２）出土陶器の概要

当遺跡では、基盤礫層を削った平坦面に東西約 2m、南北約 1m の小堂宇が建てられ、建物の北側に一段低い幅約 1.2m の道路が検出されている。この堂宇は火災にあったようで、比熱した陶器類や堂宇に葺かれていたと思われる瓦片、鉄釘類が出土している（註 26)。今回資料化を行った陶器は図 10・11 の通りで、この他未調査の瓦類と椀・皿類等の細片がある。出土陶器を器種別に見ると、火舎（50)、香炉（51)、華瓶（56・57)、三足盤（52～55)、椀（64～67)、皿（68～72)、段皿（58～61)、稜皿（62・63)、蓋（49・73）があり、概ね黒笹 90 号窯式期を中心とする時期の猿投窯産陶器とみられる。これらについて、釉薬の種類や有無に着目すると緑釉（緑彩含む)、灰釉、無釉の三種がある。無釉製品の中で 66・67 の無台椀は焼き上がり、器形双方から当該期の通有の須恵器である。一方 49～51、56～61、64、65、70、71 に示した資料は当該期の灰釉陶器、緑釉陶器、あるいは奈良時代の奈良三彩に同種の形が求められるもので、施釉の有無を除けば施釉陶器と何ら変わらない。いずれの資料も胎土や焼き上がり、形態・製作技法の特徴から、先述のように当該期の猿投窯で焼成さ

れたものと考えられる。

三足盤については現状緑釉緑彩陶器と灰釉陶器の 2 種が少なくとも 2 点ずつ存在したと考えられる (52～55)。緑釉緑彩三足盤は猿投窯産として捉えられてきたものである。なお、皿として図示したものに緑釉緑彩を施すものがある（68・69)。緑釉緑彩を施す点の他、68 の口縁部や 69 の底部の形態が三足盤（52・53）と類似しており、緑釉緑彩三足盤になる可能性もある。ただし、52・53 の欠損部には 68・69 が入るスペースが無く、52・53 とは異なる別個体であるのは確実である。現状 68 の復元口径が小さめなこと、69 の残存部には足の付け根部分等が残っていないこと等から積極的に三足盤に含めることができず、念のため皿として掲載した。

さて、これまで 51 の香炉と 73 の蓋がセットと考えられてきたが、残存率の低さはあるものの復元径を考えると合致せず、他遺跡出土品でもこの種の蓋が 51 のタイプの香炉に伴う事例を知らない。一方、他遺跡の事例だと 49 のような陰刻花文と猪目透を有する蓋が 51 のタイプの香炉に伴うことが多い。51 の香炉には内面に白色の剥落しかけた痕跡があるためか、これまで緑釉陶器として捉えられてきたが、49 の蓋の破片の表面にもわずかに釉の剥落したような痕跡が残っている。これを緑釉と考えると、双方の残存率から口径にはやや齟齬もあるが、49 と 51 がセットとなる蓋付香炉とも考えられる。ただ、これまで 49 の蓋は 50 の火舎に伴うものとして提示されてきており、その可能性も捨てきれない。というのもこちらも双方の口径にやや齟齬があるが、先述した 49 の蓋に見られる釉の剥落した痕跡はわずかな範囲で自然釉の可能性もある。施釉がなされていない場合、同じく無釉の 50 の火舎に伴うと考えるのが妥当である。

以上の内容については、49・51 に緑釉が施釉されているか否かが問題となるが、今回科学分析を行ったのでその結果を次節「（３）出土陶器の科学分析」で述べる。結論を先に述べれば 49・51 の双方とも緑釉陶器とする積極的根拠は見いだせず無釉製品だったと考えられる。そのため無釉陶器である 51 の香炉と、明らかに緑釉陶器である 73 の蓋がセットとは考え難い。一方明らかに無釉陶器である 50 の火舎を含め、49～51 は無釉陶器として結論付けられるが、結局 49 の蓋が 50 の火舎に伴うのか、51 の香炉に伴うのかは定かでない。無釉陶器の蓋は出土品中からは他に見出すことができず、火舎と香炉のいずれかはもともと蓋を有していなかった可能性も高いと考えられる。

（３）出土陶器の科学分析（図 12・13）

日本古代の緑釉は酸化鉛を主成分とした基礎釉に、呈色剤として酸化銅を添加する鉛釉陶器であることが知られ、実際の出土資料から科学的な分析も実施されている（註 27)。今回、八事一堂跡出土の蓋・香炉（図 10-49、51）の器面の緑釉の有無を調べるために、蛍光Ｘ線分析を実施した（2024 年 2 月 3 日、愛知県美術館にて実施)。

分析装置はセイコーインメルツ(株)ＳＥＡ200 を使用した。測定条件は以下のとおり。

Ｘ線管球：Ｒh、管電圧：50kＶ、管電流：200μＡ、コリメータ径：φ2㎜

測定時間：300 秒、測定雰囲気：大気

分析の結果、陶片Ａ（香炉）からは鉄（Ｆe）、カリウム（K）、チタン（Ｔi）、ケイ素（Ｓi）等が検出され、陶片Ｂ（蓋）からは鉄、カリウム、カルシウム（Ｃa）、チタン、ケイ素、マンガン（Mn）等が検出された。陶片Ａ（香炉）・Ｂ（蓋）ともに鉛（Ｐb）、銅（Ｃu）が検出されず、鉄やカリウム、チタン、ケイ素、カルシウム、マンガン等は胎土に含まれる成分であると推察できる。鉛、銅が検出された陶片Ｃ（緑釉サンプル）の分析結果のデータとの比較を踏まえても、陶片Ａ（香炉）・Ｂ（蓋）の器面に緑釉は無いと判断できる。

おわりに

以上、岩崎 25 号窯式前後の須恵器窯出土資料、桟敷 1 号窯跡出土資料、八事一堂跡出土資料について基礎的調査報告を行い、所見を簡単に述べてきた。

岩崎 25 号窯式前後の須恵器窯として紹介した鳴海 202 号窯跡出土資料（ＮＮ202 号窯跡）については、これまで同窯が高蔵寺 2 号窯式期として窯跡一覧に記載されてきたが（註 28）、形態・技法的な特徴から岩崎 25 号窯式期として考えた方が良いものと判断した。

桟敷 1 号窯跡出土資料については研究史上も取り上げられることの多かった資料だが、今回最低限の資料紹介を行った。他窯出土資料との比較検討や、消費遺跡出土資料との比較検討については今後の課題としたい。また、豊明市教育委員会所蔵の桟敷 1 号窯跡出土資料との比較検討も今後行っていきたい。

八事一堂跡出土資料については、これまで実測図が未提示だったものも含め、なるべく多くの資料を提示することに努めた。細片だが追加して資料化すべきものもいくつか残されており、今後調査を継続していきたい。また出土瓦については、出土状況等が図や文章で提示されているが（註 29）、瓦そのものの詳細な調査報告はなされておらず、今後の大きな課題として残っている。今回、蛍光Ｘ線分析によって火舎・香炉と蓋のセット関係が再検討を行ったが、結果として火舎・香炉の蓋とする考えを否定するに至った図 11-73 が何の蓋なのか、蓋ではなく皿状の器種なのか、他遺跡出土資料を含めて再検討する必要性がある。また、無釉陶器が多いことについても、他遺跡の様相との比較検討を行い改めて評価を行っていきたい。

謝辞

「４．八事一堂跡出土資料　（３）出土陶器の科学分析」で述べた八事一堂跡出土資料の測定および結果の分析にあたっては、田村哲氏（元・愛知県陶磁美術館主任学芸員）に御協力いただいた。記して御礼申し上げる。

［註］

(1) 大西遼 2018「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ｉ－猿投窯東山地区及び尾北窯篠岡地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査－」『愛知県陶磁美術館研究紀要』

23　愛知県陶磁美術館。

大西遼 2019「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅱ－猿投窯東山地区及び尾北窯出土須恵器・瓷器の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館研究紀要』24　愛知県陶磁美術館。

大西遼 2020「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅲ－猿投窯東山地区出土瓷器の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館研究紀要』25　愛知県陶磁美術館。

大西遼 2021「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅳ－猿投窯黒笹・東山地区出土須恵器・瓷器の考古学的調査」『愛知県陶磁美術館研究紀要』26　愛知県陶磁美術館。

大西遼 2022「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅴ－猿投窯黒笹 91 号窯跡、中世猿投窯出土重要陶片の考古学的調査－」『愛知県陶磁美術館研究紀要』27　愛知県陶磁美術館。

大西遼・河野あすか 2023「愛知県下の窯業遺跡出土資料に関する基礎的調査報告Ⅵ－猿投窯井ケ谷地区・東山地区出土資料の考古学的調査－」『愛知県陶磁美術館研究紀要』28　愛知県陶磁美術館。

(2) 井上喜久男・城ヶ谷和広 2015「第 5 節　編年論」『愛知県史』別編　窯業 1　古代　猿投系　愛知県。

(3) 前掲註 (1)。

(4) 愛知県史編さん委員会 2015『愛知県史』別編　窯業 1　古代　猿投系　愛知県。

(5) 前掲註 (4)。

(6) 前掲註 (4)。

(7) 安藤義弘 2001「桟敷一号窯遺跡」『豊明市史』資料編補 1　原始・古代・中世　豊明市。

(8) 前掲註 (7)。

坂野和信 1979「日本古代施釉陶器の再検討〔Ⅰ〕―初期の鉛釉陶・灰釉陶―」『考古学雑誌』第 65 巻第 2 号　日本考古学会。

(9) 前掲註 (7)。前掲註 (8) 坂野和信 1979。

尾野善裕 2002「平安時代における緑釉陶器の生産・流通と消費」『国立歴史民俗博物館研究報告』第 92 集　（財）歴史民俗博物館振興会　等。

(10) 前掲註 (8) 坂野和信 1979。

(11) 前掲註 (8) 坂野和信 1979。

(12) 前掲註 (8) 坂野和信 1979。

(13) 井上喜久男 2015「平安時代の瓷器生産」『愛知県史』別編　窯業 1　古代　猿投系　愛知県。

(14) 前掲註 (13)。

(15) 前掲註 (7)。前掲註 (8) 坂野和信 1979。

(16) 前掲註 (7)。

井上喜久男 2015「桟敷 1 号窯」『愛知県史』別編　窯業 1　古代　猿投系　愛知県。

（17）井上喜久男・楢崎彰一 1992『猿投窯―黒笹 7 号窯跡発掘調査報告書』東郷町教育委員会。

（18）近年の論考だと以下等がある。

城ヶ谷和広 2015「奈良時代の須恵器生産」『愛知県史』別編 窯業 1 古代 猿投系　愛知県。

井上喜久男 2020「青瓷と白瓷の話」『東海窯業史研究論集』Ⅲ　東海窯業史研究会。

尾野善裕 2023「古代尾張の窯業生産と天皇家産機構」『文化財論叢』Ⅴ　奈良文化財研究所。

（19）齊藤孝正・伊藤稔・加藤安信 1983『愛知県古窯跡群分布調査報告』（Ⅲ）　愛知県教育委員会。

（20）前掲註（1）大西遼 2018。

（21）前掲註（19）。

（22）前掲註（19）。

（23）楢崎彰一 1961「八事一堂址」『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会。

（24）深谷淳 2013「八事小堂跡」『新修名古屋市史』資料編　考古 2　名古屋市。

（25）池本正明 2011「金萩遺跡刻書土器小考」『研究紀要』第 12 号　愛知県埋蔵文化財センター。

（26）前掲註（23）。

（27）山崎一雄 1998「緑釉と三彩の材質と技法」『日本の三彩と緑釉―天平に咲いた華―』愛知県陶磁資料館　等。

（28）前掲註（4）。

（29）前掲註（23）。

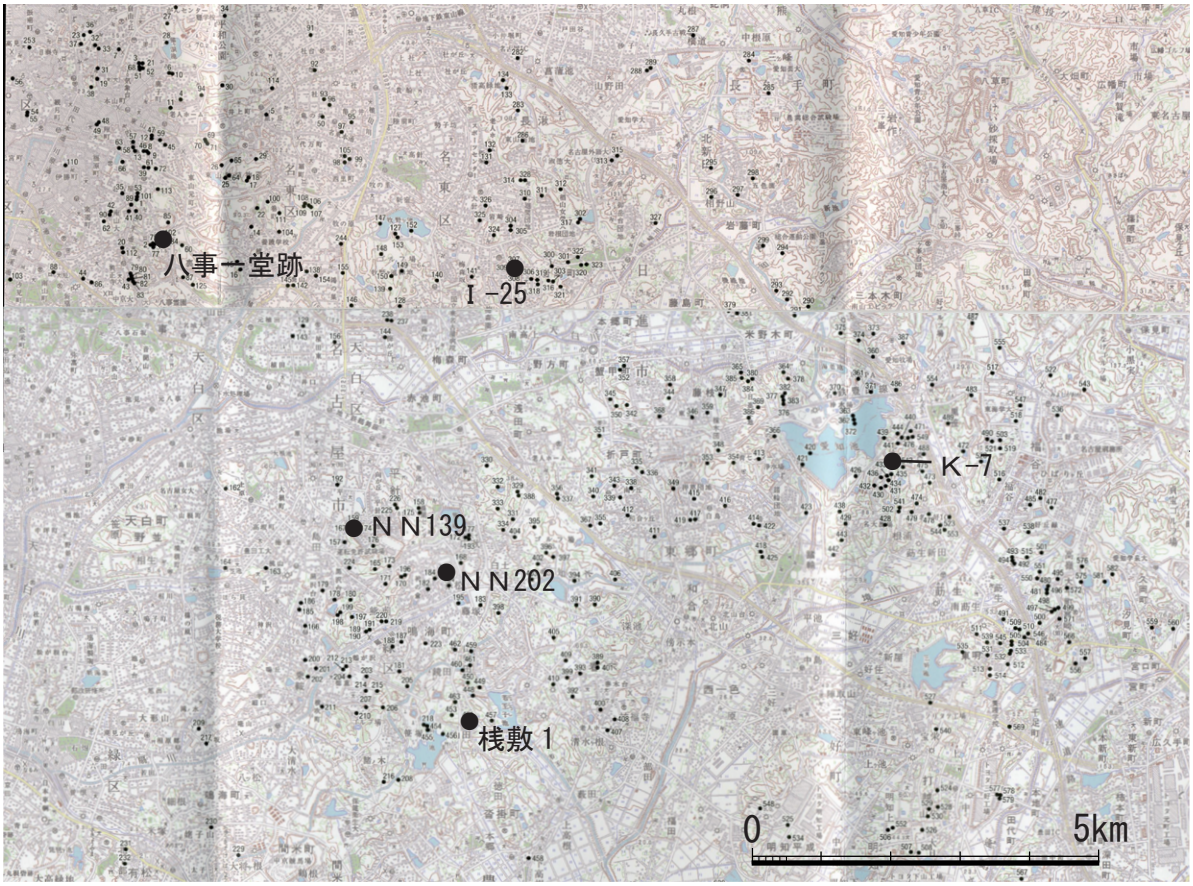


図１　本稿で扱う資料の出土遺跡（註４文献を改変）

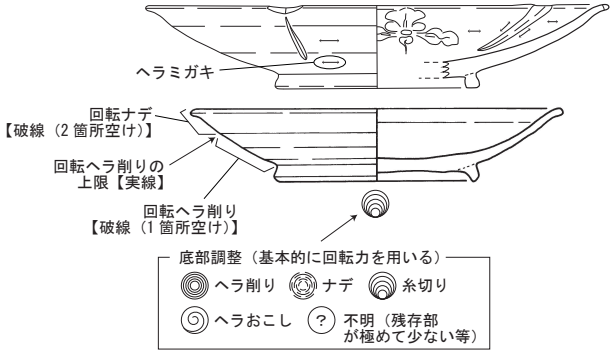


図２　本稿の実測図の表現

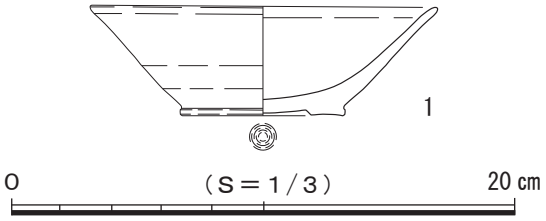


図３　黒笹７号窯跡出土資料
（愛知県陶磁美術館保管）

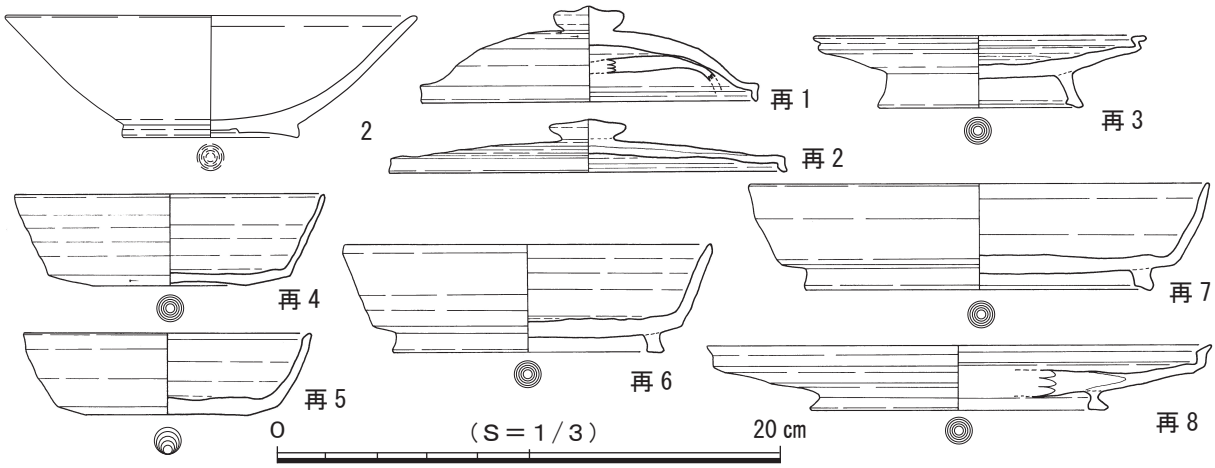


図４　篠岡高根窯跡出土資料（愛知県陶磁美術館保管）（再１～８：註１（大西遼 2018））

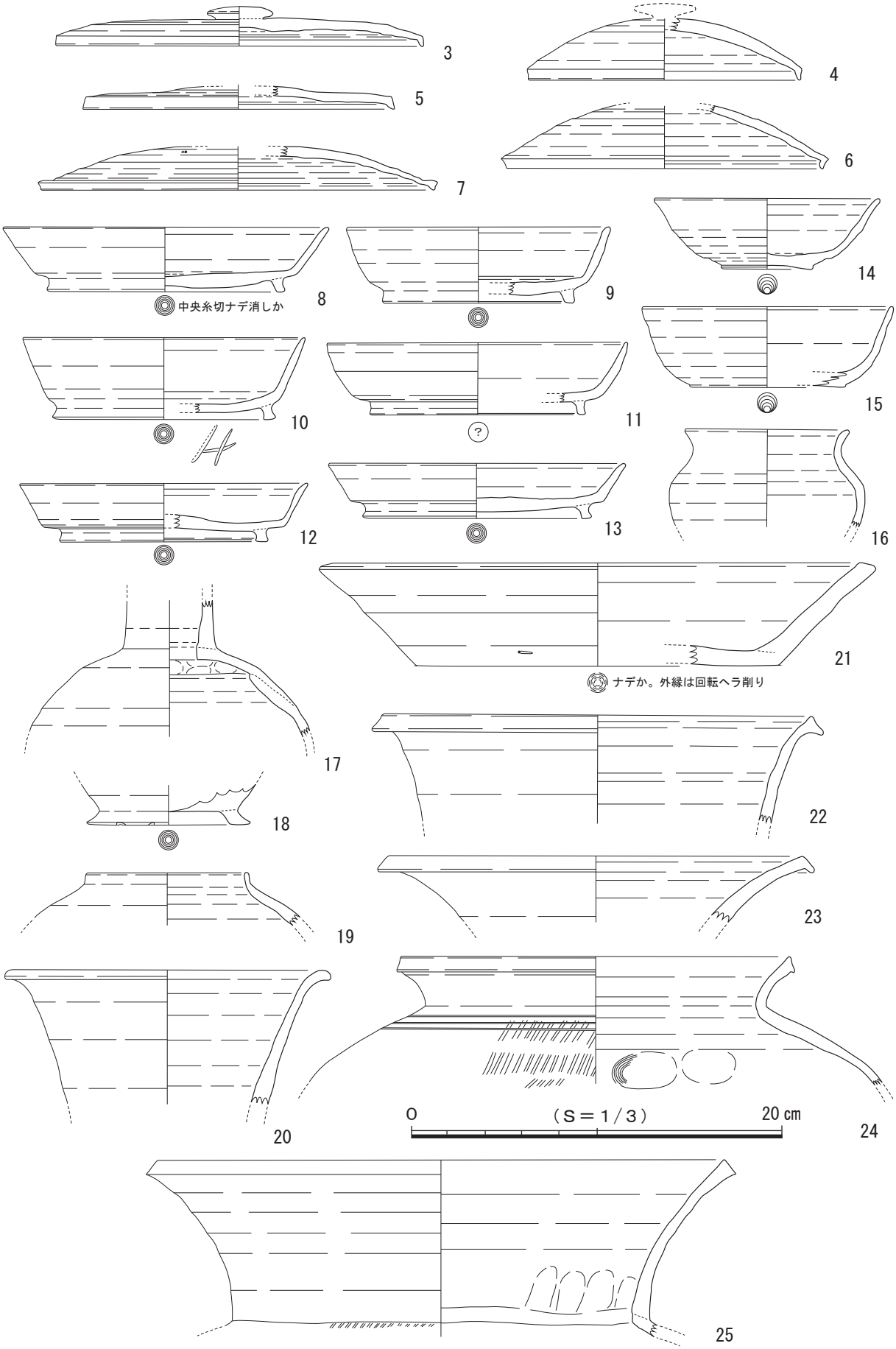


図５　鳴海 202 号窯跡（ＮＮ202 号窯跡、N-2 号窯跡）出土資料（愛知県陶磁美術館保管）

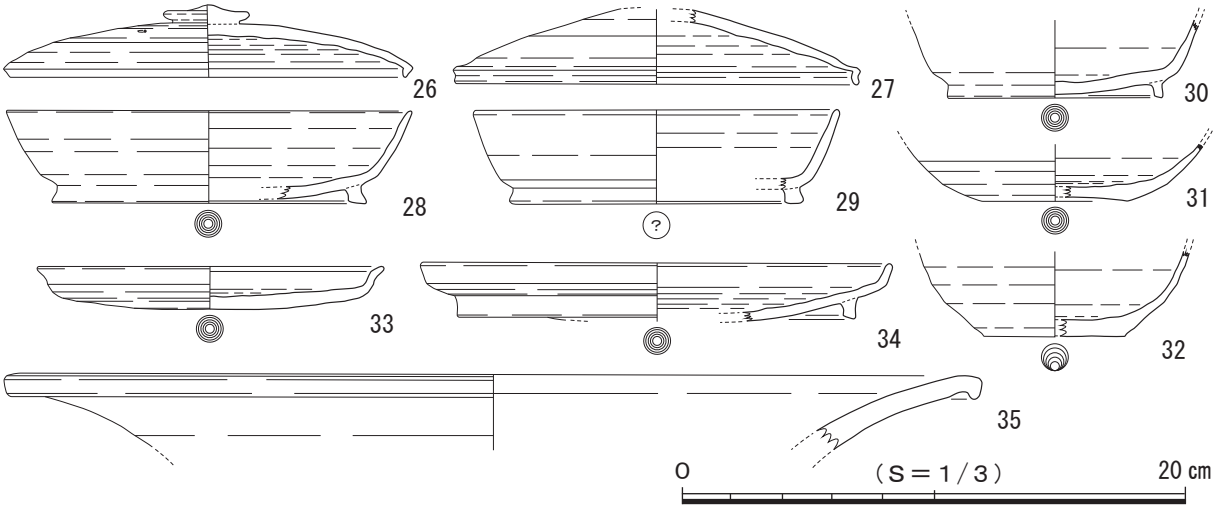


図６　岩崎 25 号窯跡（I-25 号窯跡）出土資料（愛知県陶磁美術館保管）

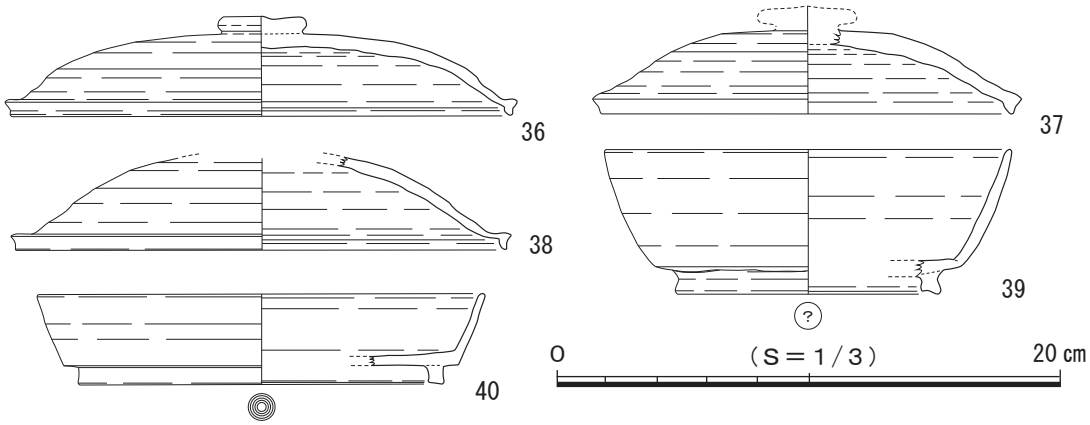


図７　鳴海 139 号窯跡（ＮＮ139 号窯跡、N-9 号窯跡）出土資料（愛知県陶磁美術館保管）

図９-41

図９-42

図９-43

図９-44

図９-45

図９-46

図８　桟敷 1 号窯跡出土資料①(愛知県陶磁美術館所蔵、A007414)

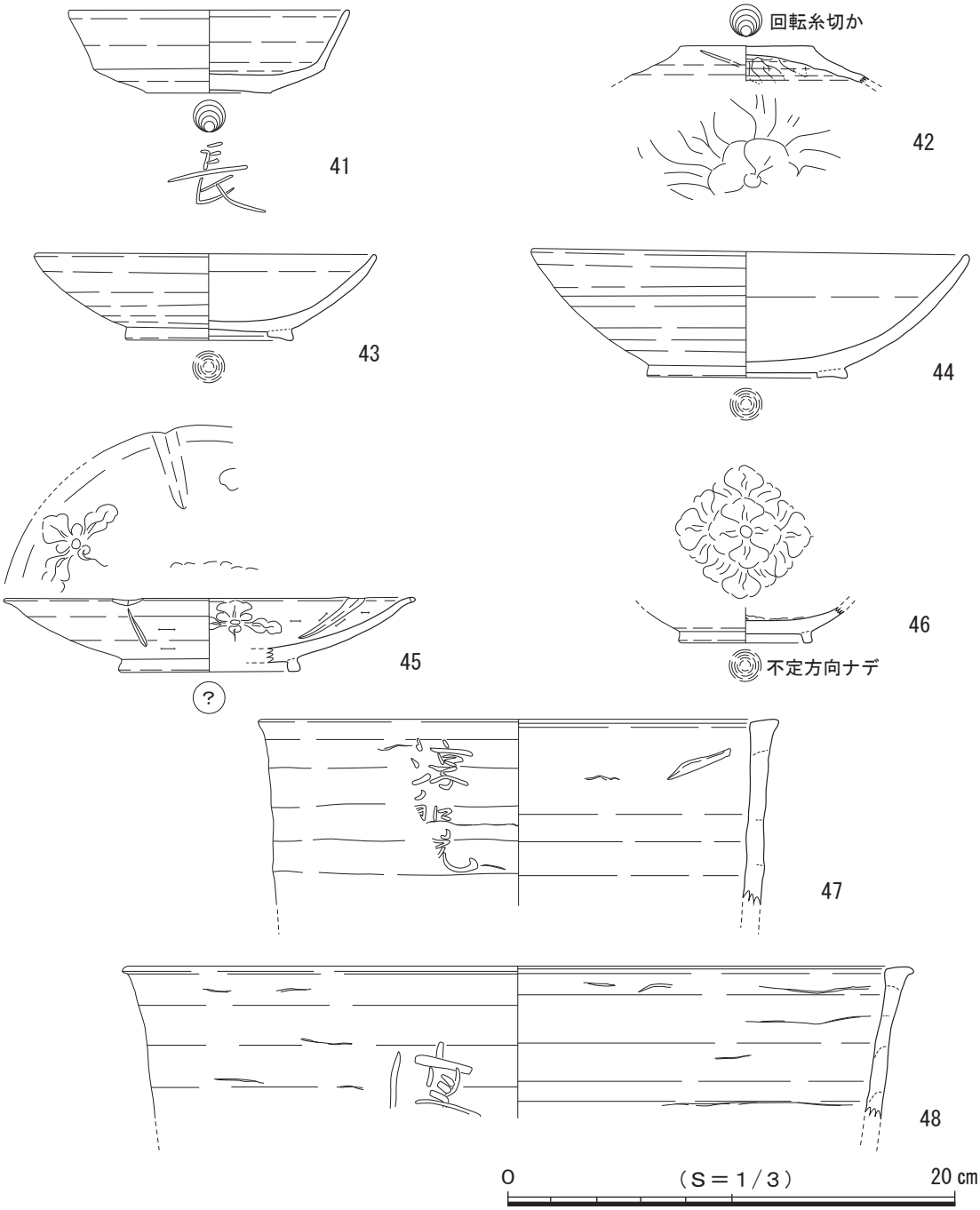


図９　桟敷１号窯跡出土資料②(愛知県陶磁美術館所蔵、A007414)

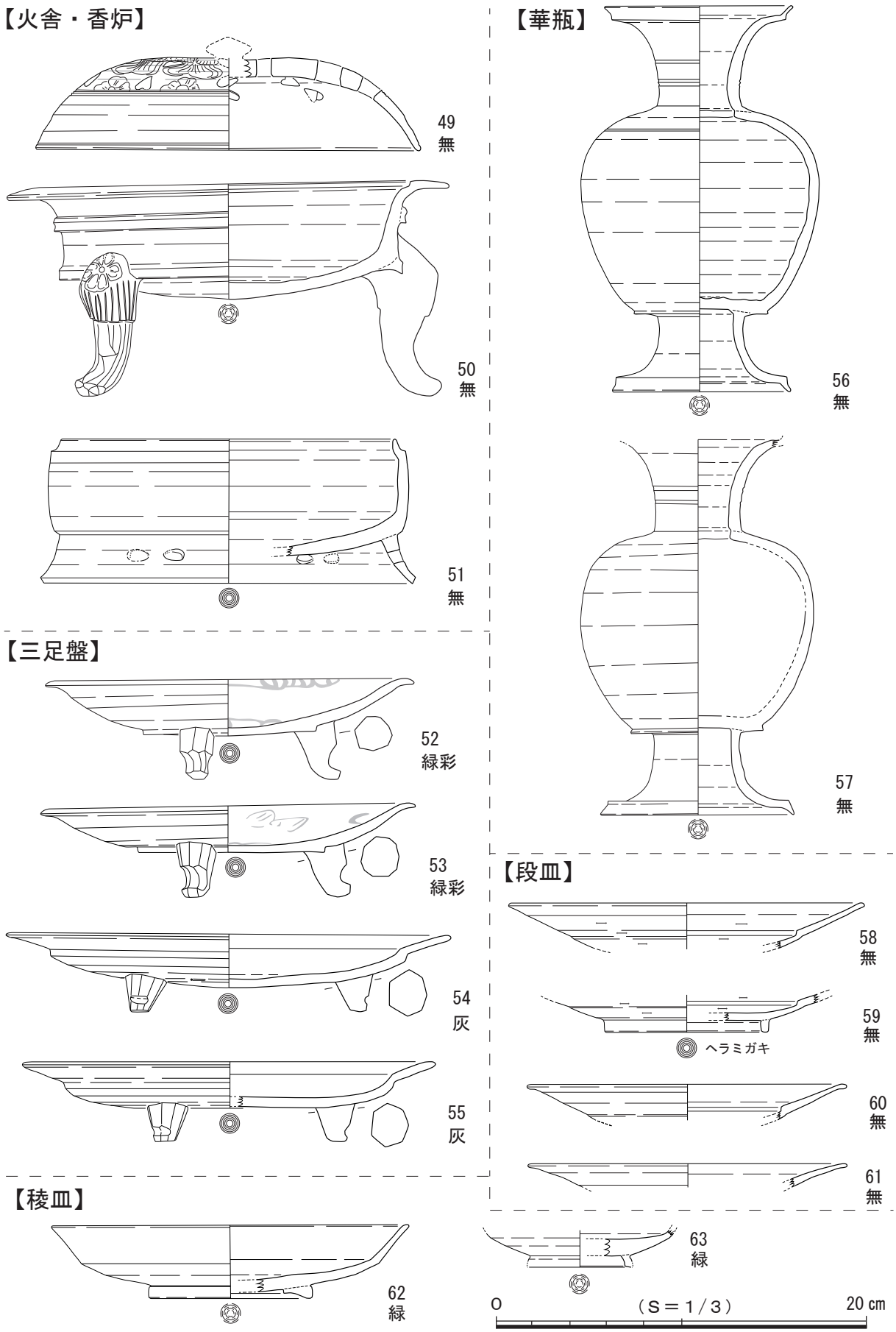


図 10　八事一堂跡出土資料（愛知県陶磁美術館所蔵）①

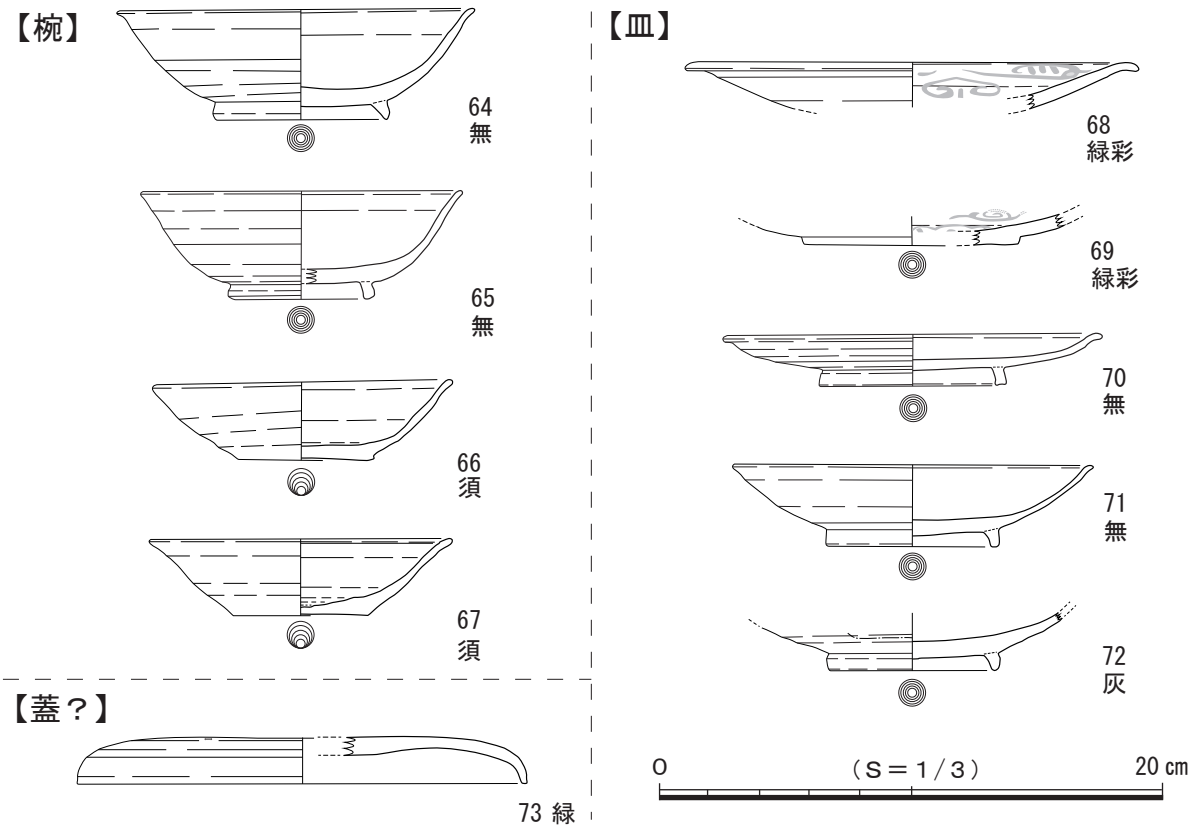
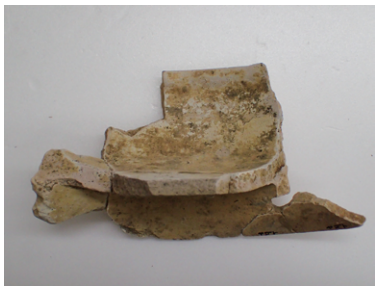
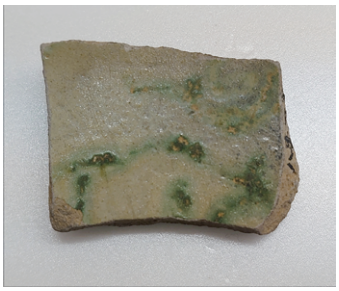


図 11　八事一堂跡出土資料（愛知県陶磁美術館所蔵）②



陶片 A 内側（図 10-51）

陶片 B 外側（図 10-49）

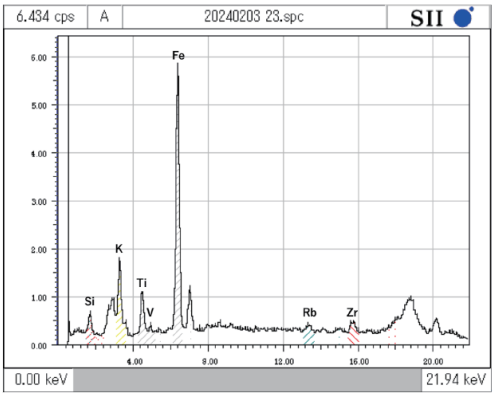


陶片 C 外側
（緑釉サンプル、図 11-69）

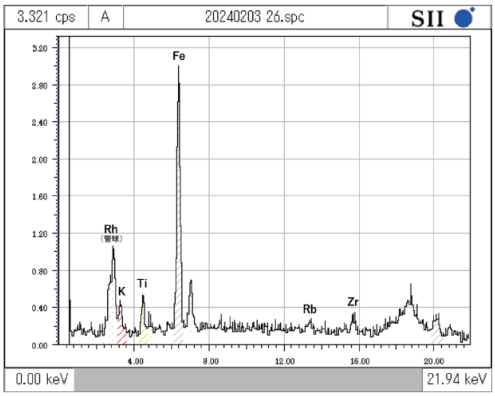
陶片 A 拡大（剥落痕跡）

陶片 A 拡大（剥落痕跡）

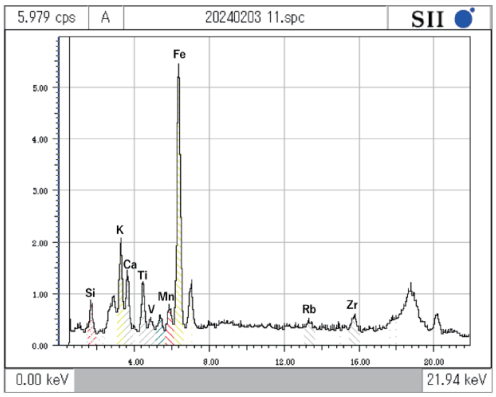
図 12　蛍光Ｘ線分析実施資料（八事一堂跡出土資料）



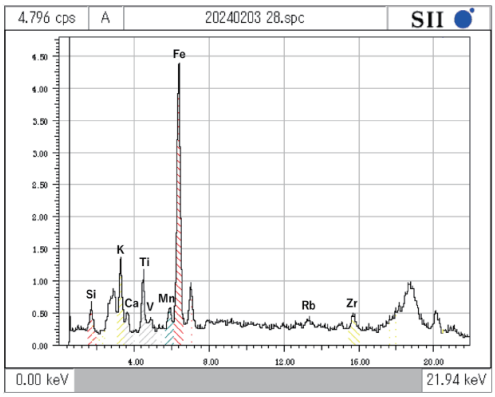
(a)



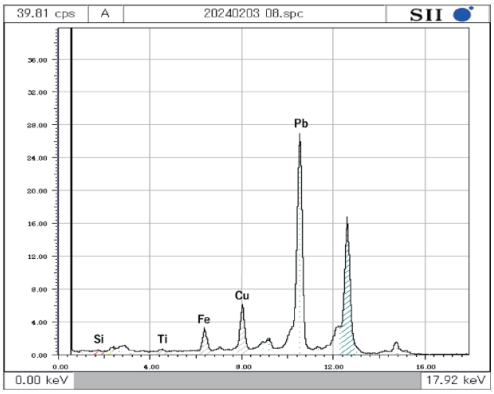
(b)



(c)



(d)



(e)

(a)、(b) 陶片 A のスペクトルデータ

(c)、(d) 陶片 B のスペクトルデータ

(e) 陶片 C（緑釉サンプル）のスペクトルデータ

図 13　蛍光X線分析スペクトルデータ（八事一堂跡出土資料）